

令和 2 年 7 月 1 日現在

機関番号：33707

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K15893

研究課題名（和文）総力戦体制下の育児雑誌に見る「母子保健」思想：『愛育』誌と『愛育新聞』誌を中心に

研究課題名（英文）The concept of maternal and child health in child care magazines under total war: Focusing on Aiiku and the Aiiku newspaper

研究代表者

真鍋 智江 (MANABE, Chie)

中部学院大学・看護リハビリテーション学部・講師

研究者番号：20369531

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、総力戦体制下に恩賜財団愛育会（1934年3月創立の母子保健事業団体）が発行した機関誌『愛育』『愛育新聞』の記事から、同会が主張した「母子保健」思想を抽出し、その歴史的特質を検討した。結果、愛育会が主張した「母子保健」思想は、「科学技術新体制」を背景として科学的な育児に重点をおいていたことを指摘した。そのねらいは、科学的根拠に基づいた正しい育児知識や技術の普及により誤った伝統的な育児方法を改善し、欧米諸国よりも高い乳児死亡率を低減することであった。事例から愛育会は、書籍出版のほか保姆や保健婦を教育することで「母子保健」思想の普及を図り、乳児死亡率の低減に貢献したことも明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、愛育会が主張した「母子保健」思想を探る上で、「母子保健」に関する研究や愛育会研究において見過ごされてきた愛育研究所保健部による調査研究に着目した。この試みによって、国策である「国民生活の科学化」の高まりと、愛育会による科学的な育児を普及するための取り組みとの結びつきを明らかにすることができた。また、そうした「科学」を軸とした探究によって、総力戦体制下における愛育会、行政、地域住民の三者の関係性を浮かび上がらせることとなった。これらの成果は、看護学分野のみならず、隣接する保育学・教育学・社会福祉学分野などの歴史学研究において新たな見解を言及したといえよう。

研究成果の概要（英文）：This study examined the historical background of the concept of maternal and child health based on articles in the "Aiiku" magazine and the "Aiiku newspaper," published by the Imperial Gift Foundation Aiiikukai - a maternal and child health organization established in 1934. The results indicated that the concept of maternal and child health advocated by Aiiikukai emphasizes scientific child-rearing against the backdrop of new science and technology. Aiiikukai's aim is to reduce the infant mortality rate higher than in Western countries by improving parenting skills and disseminating knowledge about proper parenting based on scientific evidence. This study also demonstrated that Aiiikukai succeeded in reducing infant mortality by promoting the concept of maternal and child health through educating nurses and public health officials and publishing parenting books.

研究分野：基礎看護学

キーワード：社会事業史 母子保健 乳児死亡率 恩賜財団愛育会 愛育研究所 斎藤文雄 地域婦人会 育児

1. 研究開始当初の背景

(1) 総力戦体制下の「母子保健」に関する研究動向

1930年代半ばから1945(昭和20)年の敗戦に至る時期、いわゆる総力戦体制下は「母子保健」に社会的関心が向けられ、主要都市における小児保健所の設置や巡回産婆の全国的な拡がり、「妊産婦手帳規程」の制定による妊娠届出制の導入など、妊産婦および乳幼児の健康増進のための多様な取り組みが行われた時代である。しかし、そうした戦時下の「母子保健」に関する研究は、最も関連のある看護学分野において、通史や行政史の一部、保健婦・産婆・助産婦の個人史といった内容のものが中心に行われている。

(2) 総力戦体制下における「恩賜財団愛育会」をめぐる研究動向

総力戦体制下に活発な母子保健事業を展開した団体のひとつに1934(昭和9)年3月に設立された「恩賜財団愛育会」(現在は「社会福祉法人恩賜財団母子愛育会」)がある。

同会による事業は、『内務省史』や『厚生省五十年史』において取り上げられており、日本の「母子保健」発展に関与したことがうかがえる。一方、先行研究においては、教育・保育学の分野を中心に、吉長真子による愛育村の研究、河合隆平・高橋智による愛育研究所の異常児保育の研究、西脇二葉による愛育隣保館の研究などが集中的に行われてきている。しかし、管見による限り、愛育会が展開した母子保健事業の根幹となる「母子保健」思想に着目し、その思想の歴史的特質について論じられたものは見当たらなかった。

2. 研究の目的

本研究は、総力戦体制下に「恩賜財団愛育会」が発行した『愛育』誌および『愛育新聞』誌の掲載記事を取りあげ、それらに見られる「母子保健」思想が内包する歴史的特質を検討する。その試みにより、「母子保健」に関する歴史的遺産を発掘し、総力戦体制下に展開された母子保健事業の本質に迫りたい。

3. 研究の方法

本研究における研究計画は、当初、『愛育』や『愛育新聞』のほか、日本子ども家庭総合研究所の図書室(東京都港区)で所蔵されている愛育会の事業に関する一次史料を収集する予定であった。しかし、同図書館の閉館によりそれが困難となった。そのため、こうした予期せぬ出来事に対応して、研究方法を変更し、愛育会の母子保健事業を支えた愛育研究所保健部の動向にも着目して、愛育会が主張した「母子保健」思想を探った。

以上のことから、本研究は先行研究の調査・収集・レビューを行いつつ、次の(1)から(4)の4つのステップで進めた。

(1) 愛育会が発行した『愛育』や『愛育新聞』について、「母子保健」に関わる論稿・記事などを収集・整理・分析した。また、諸大学の附属図書館や公立図書館、国立国会図書館などが収蔵する愛育会による「母子保健」関連の史資料を調査・収集し、同会の動向を整理した。それにより明らかになった史実をもとに、総力戦体制下という時代に愛育会が主張した「母子保健」思想の輪郭を把握し、研究成果の報告を行った。

(2) 「母子保健」思想に関連する史資料の収集・整理・分析を継続して進めつつ、愛育会の母子保健事業を支えた愛育研究所保健部の斎藤文雄部長(愛育医院長兼務)が執筆した論文や著書の調査・収集・整理を行い、同保健部の動向および「母子保健」に関する主張を把握した。

さらには、愛育関係者による論文や著書および総力戦体制下における「母子保健」関連の雑誌論文や単行本など、各種史資料の調査・収集も広く行い、愛育会が主張した思想の背後にある社会的文脈を押さえ、研究成果の報告を行った。

(3) これまで調査・収集した史資料における「母子保健」思想の整理・分析に加え、斎藤文雄の論文や著書、愛育会の刊行物から、愛育会が重点を置いた乳児栄養の改善について整理・分析した。一方で、愛育会による育児書2冊の内容を比較分析し、同会が主張した「母子保健」思想を指摘し、研究成果の報告を行った。

(4) 愛育会が主張した「母子保健」思想の歴史的特質を検討するために、島根県安来市荒島町(旧 能義郡荒島村)に保管されていた史料や関係者の証言、そのほか地域行政資料、郷土資料を収集・整理し、事例研究をした。これについても、研究成果の報告を行った。

4. 研究成果

(1) 平成28年度(1年目)

収集した史資料は、どれも愛育会がどのような思想により母子保健事業の展開をしたのかわかる手がかりとなった。しかし、そのうちの『愛育新聞』は、当時、消耗品として扱われていたためか、現在では僅かに数カ所の図書館に点在するのみで、散逸しているものもあった。

こうしたことから、愛育会の「母子保健」思想を抽出・分析するために、点在している『愛育新聞』を収集し、研究代表者が“『愛育新聞』総目次”を作成した。同誌は、1938(昭和13)年4月から1943(昭和18)年10月(第6巻第10号)まで刊行された月刊新聞(月刊誌)であり、そこに掲載された論稿・記事などをすべて拾い上げるかたちでまとめた。その“『愛育新聞』総目次”は、本研究において活用しただけでなく、総力戦体制下における「母子保健」の歩みを映し出す資料として、様々な分野の方々に多様なかたちで活用していただけることを願い発行した。

なお、完成したその総目次は、「社会福祉法人 恩賜財団愛育会 愛育研究所」「国立国会図書館」、愛育会と関係の深い「東京大学医学部図書館」「金沢大学医学部図書館」「東北大学附属図書館医学部分館」「岡山大学附属図書館」「伊勢原市立図書館」「函館市中央図書館」、現在『愛育新聞』を所蔵している「早稲田大学中央図書館」「大阪府立中央図書館」、その他、「千葉大学附属図書館」「日本福祉大学附属図書館」「中部学院大学附属図書館」の13カ所に寄贈し公表を行った。

また、研究分担者は、『愛育』および『愛育新聞』に掲載された「母子保健」関連記事、愛育会発行の単行本の一部を使用して、幼児教育史学会において口頭発表を行った。それは、1920年代後半から1960年代はじめまで数多くの論稿を各誌に寄せ、独自の育児論を展開した廣瀬興(愛育隣保館館長、愛育会福祉部長)について、彼が総力戦体制下にまとめた数冊の単著を手がかりとしながら、そこに見られる「母子保健」思想を探ったものである。

(2) 平成29年度(2年目)

本年度は、愛育会の母子保健事業を支えた愛育研究所保健部の状況にも着目して研究を進めた。具体的には、斎藤文雄が執筆した論文や著書を収集する一方、関連文献を集め整理し、総力戦体制下の保健事業をめぐる政策や小児科医、産婦人科医の動向などの把握にも努めた。斎藤に注目したのは、彼が保健部長および愛育医院長(小児科医)として医学的側面から保健部の諸活動を指導し、全体を統括する立場にあったからである。

収集した斎藤文雄の論文や著書については、研究代表者が、その論調の変化を追うため時系列に従って整理し、“斎藤文雄著作目録(戦前・戦中期編)”として冊子にまとめ、国立国会図書館・公立図書館・大学図書館などに寄贈するかたちで研究成果の公表をした。

研究分担者は、愛育会が総力戦体制下に発行した育児書『愛育読本』(三省堂、1935年)と『愛育のこゝろ こどもの保健と教養』(三省堂、1940年)の2冊を取りあげ、両者に見られる思想的変化を研究ノート「恩賜財団愛育会の育児思想 総力戦体制下に編輯された2冊の育児書を手がかりとして」にまとめた。

同稿では、総力戦体制下における「愛育(育児)思想」の変移というケーススタディの形で、2冊の内容を比較し、育児思想の大衆(社会)化が持つ意味として、1)読者を母親中心から専門職も含めた形へと広げた点、2)「愛育科学」という言葉に象徴される「科学性」の重視、3)「愛育のこゝろ」をめぐる「自然主義」的立場の後退について指摘した。

(3) 平成30年度(3年目)

本年度は、前述した『愛育のこゝろ』で、愛育会が育児に科学性を重視した背景を知るために、愛育研究所保健部が行った“離乳期栄養状況調査”に焦点をあてた。その結果、愛育会は「科学技術新体制確立要綱」(1941年5月27日閣議決定)による「国民生活の科学化」の高まりのなかで科学的根拠に基づいた育児方法の研究・普及に努めていたことを明らかにした。これについては、研究代表者が、論文「総力戦体制下における『育児の科学化』 - 斎藤文雄を中心とした愛育研究所保健部の取組に焦点をあてて - 」にまとめ報告をした。

さらに、保健部の動向から、同部は“離乳期栄養状況調査”を経て乳児死亡率の低減を図るため、乳児栄養の改善をめざした研究を積み重ねていたこと、その研究内容は国策として推進された戦時国民食と関連があることを捉えた。それについても研究代表者が、論文「総力体制下における乳児死亡率の低減 - 愛育研究所保健部による乳児栄養の改善をめざした研究に焦点をあてて - 」によって報告した。

(4) 平成31年度(4年目)

本年度は研究をより精緻に達成するため、補助事業期間を1年間延長し、現地調査による事例研究を行った。具体的には、島根県能義郡荒島村婦人会の活動とそれによる成果を調査し、愛育会が地域に何をもたらしたのかを明らかにすることで「母子保健」思想の歴史的特質を検討した。

その結果、乳児死亡率が高かった荒島村では、同婦人会による農繁期託児所や幼稚園、保育所の運営を基盤として始められた母子保健事業において、愛育会の指導を受けた女子青年団員や保健婦が中心となり、科学的な正しい育児知識や技術を地域に普及したことで、村の乳児死亡率が低減したことを明らかにした。そして、こうした母子保健事業は、村の保健所として機能し、近代化が遅れていた農村で、保健医学による社会改革をめざすものであったことを指摘した。それについては研究代表者が、「島根県能義郡荒島村婦人会の発展過程からたどる愛育村指定の意味 - 創立から終戦までの活動を概観して - 」によって報告した。

また、本研究を進めるにあたり、収集した戦後の斎藤文雄の論文や著書は、平成 29 年度(研究 2 年目)に編纂した“斎藤文雄著作目録(戦前・戦中期編)”に加えるかたちで、研究代表者がその改訂版として“斎藤文雄著作目録(総合編)”を発行し、国立国会図書館や公立・大学図書館への寄贈によって公表した。

〔研究成果の位置づけとインパクト〕

本研究では、文献研究から現地調査による事例研究へと発展させ、質的・量的研究では浮上し得ない過去に埋もれた社会的事柄の発掘、整理、分析を行った。加えて、「消耗品」として扱われ散逸している雑誌の掲載記事をも収集し、編纂した総目次や著作目録によって公表に努めた。

これらの成果は、総力戦体制下という時期を扱う歴史学研究のほか、看護史や教育史、保育史、社会事業史、女性史などにおいても貢献できるものを提示し得たと考える。

〔今後の展望〕

本研究において、愛育会が主張した「母子保健」思想を探るうち、総力戦体制下における愛育会と官・民との関係性や、地域婦人会で活動する女性たちの姿も浮かび上がった。今後は、歴史のなかでつくられたこのような事象を見逃さず、戦争史や政治史も踏まえマクロな視点から総力戦体制下の「母子保健」をめぐる社会構造を明らかにし、愛育会の特質や同会が存在した意味を検討する必要がある。こうした課題に挑むことは、未だに不明瞭な、戦前から戦後にかけての「母子保健」の歴史に向き合い、現代における意味を問うことでもあると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 真鍋智江	4. 巻 20
2. 論文標題 総力戦体制下における「育児の科学化」 - 斎藤文雄を中心とした愛育研究所保健部の取組に焦点をあてて-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中部学院大学・中部学院大学短期大学部 研究紀要	6. 最初と最後の頁 21-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 真鍋智江	4. 巻 25
2. 論文標題 総力戦体制下における乳児死亡率の低減 - 愛育研究所保健部による乳児栄養の改善をめざした研究に焦点をあてて-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 子ども社会研究	6. 最初と最後の頁 147-165, 170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 真鍋智江	4. 巻 21
2. 論文標題 鳥根県能義郡荒島村婦人会の発展過程からたどる愛育村指定の意味 - 創立から終戦までの活動を概観して-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中部学院大学・中部学院大学短期大学部 研究紀要	6. 最初と最後の頁 33-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 浅野俊和
2. 発表標題 廣瀬興の育児思想 - 総力戦体制下を中心に -
3. 学会等名 幼児教育史学会 第12回大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 真鍋 智江	4. 発行年 2017年
2. 出版社 私家版	5. 総ページ数 24
3. 書名 『愛育新聞』 総目次 第1巻第1号:1938(昭和13)年4月～第6巻第10号:1943(昭和18)年10月	

1. 著者名 真鍋智江	4. 発行年 2018年
2. 出版社 私家版	5. 総ページ数 30
3. 書名 斎藤文雄著作目録(戦前・戦中期編) 1924(大正13)年～1945(昭和20)年	

1. 著者名 真鍋智江	4. 発行年 2020年
2. 出版社 私家版	5. 総ページ数 43
3. 書名 斎藤文雄著作目録(総合編) 1924(大正13)年～1964(昭和39)年	

〔産業財産権〕

〔その他〕

ホームページ等 浅野俊和、恩賜財団愛育会の育児思想 ―総力戦体制下に編輯された2冊の育児書を手がかりとして-、子育て支援に関する研究(日本ペスタロッチ・フレイベル学会課題研究報告書)、2018、pp.51-60、総ページ数180

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	浅野 俊和 (ASANO Toshi kazu) (00300351)	中部大学・現代教育学部・教授 (33910)	2019年4月10日まで